

## 旭川医科大学回顧資料 (17) 平成元 (1989) 年度

### 旭川医科大学同窓会創立 10 周年

1989 年は、年明け早々の 1 月 7 日に昭和天皇が崩御し、翌 8 日に平成と改元された年である。2 月に新宿御苑で大喪の礼が行われ、世界 164 か国から元首級の要人ほか多数が列席した。

年度が改まった 4 月 1 日には、大型間接税たる消費税が創設された。税率は 3% であり、現在の 8%、さらに近い将来に予定されている 10% に比べると隔世の感があるが、それでも、野党の反対を押し切ったの難産の末の船出であった。税の実施に伴い、釣銭の 1 円硬貨が各地で不足した。

4 月 25 日、とぎの首相竹下登は、元秘書によるリクルートコスモス社からの未公開株譲渡 (リクルート事件) などによって生じた国民の政治不信の責任をとるとして、辞任を表明した。6 月 2 日には宇野宗佑が首相に就任したが、7 月 23 日の参議院議員選挙で与野党の議席数逆転をゆるしたことに加え、自身の女性スキャンダルの発覚もあって、彼は 7 月 24 日に辞任を表明した。8 月 9 日には宇野に代わって海部俊樹が首相に就任した。

文化面での話題を拾うと、2 月 9 日には国民的漫画家として親しまれた手塚治虫が死去した。6 月 24 日には、歌謡界の女王と称され国民的歌手として親しまれた美空ひばりが死去した。9 月 12 日には礼宮 (のちの秋篠宮) 文仁親王と川嶋紀子さんとの婚約が決定した。9 月 29 日には横綱千代の富士が国民栄誉賞を受賞した。

ほかに、任天堂から「ゲームボーイ」が発売されて一躍ヒット商品になったのも、東京モーターショーが幕張メッセで初開催されたのも、金融機関の週休 2 日制がスタートしたのも、新宿・渋谷駅に JR 初の発車メロディーが導入されたのも、NHK が衛生テレビの本放送を開始したのもこの年であった。

流行語には、「ハナモク」(木曜日が遊ぶには最もとてもふさわしい日ということから)、「カイワレ族」(カイワレ野菜のように、管理社会の中でしか生きることが認められない中高生)、「5 時から男」(終業時間である 5 時になると元気になるサラリーマンのこと)、「ほたる族」(家族に敬遠されベランダに出て喫煙する男性) などがあった。ベストセラーには、吉本ばなな『TUGUMI』『キッチン』、村上春樹『ノルウェーの森』、藤村由加『人麻呂の暗号』などがあった。

国外に眼を転じると、6 月 4 日には中国で天安門事件が勃発した。天安門広場を占拠した学生・市民らを中国当局が「反革命暴乱」として装甲車・戦車で制圧したこの事件では、死者が数百名に及んだ。11 月 9 日には東西ドイツを隔てていた「ベルリンの壁」が取り壊され、急速に東西対立の戦後体制は崩壊していった。このように、平成元年度は国内外ともに政治情勢が目まぐるしい変動した時期であった。

さて、この平成元年度の旭川医科大学に目を転じると、内外情勢とは相違して比較的平穏な 1 年であった。4 月 1 日に入学定員が 20 名減により 100 名となった。当初の 100 名が、医師不足に対処するため 1979 (昭和 54) 年度に 120 名に増やされ、それが元に戻ったわけである。6 月 28 日には附属病院に輸血部が設置された。

この年の比較的大きな出来事といえば、旭川医科大学同窓会が創立 10 周年を迎えたことである。

第 1 期生の卒業を間近に控えた 1978 (昭和 53) 年 11 月、「大学に残るにしても外に出るにしても、旭川医科大学の卒業生として横と縦の連絡をもって相互の親睦をはかり、研鑽を積み、母校の発展に協力しよう」、との大きな目標を掲げて、旭川医科大学同窓会の結成が 1 期生により決議された。そして、1 期生の卒業と軌を一にして翌 1979 (昭和 54) 年 4 月 1 日に同会は発足した。

発足当初の規程では、会員は名誉会員 (学長・前学長)、特別会員 (教授・助教授・前教授・前助教授)、正会員 (本学卒業生・本学大学院卒業生) より構成され、発足時の会員は、第 1 期卒業生 78 名と名誉・特別会員 76 名の計 154 名であった。

役員として会長（1名）、副会長（2名）、幹事（各期2名）、常任幹事（幹事より互選された若干名）、会計幹事（2名）が置かれた。役員任期は2年で、当初の役員は会長吉田晃敏・副会長斉藤達也・同鈴木保名でスタートした。第2期は会長斉藤達也・副会長秋山建児・同坂本尚志の構成となった。続く1年間は後任が選出されず、そのまま第2期の役員が職務を行ったが、1983年9月より吉田晃敏が再び会長に就任し、秋山・坂本は副会長に再選された。以降、第3期（1984～86年）、第4期（86～88年）、第5期（88～90）年と同じ会長・副会長体制で職務が続けられ、第5期の途中で創立10周年を迎えたわけである。

以上の記述は、創立11年目に旭川医科大学同窓会事務局によって発行された『同窓会誌』第8号（1990年発行、発行月日は不詳）所収の、坂本尚志氏（執筆当時は千葉大学医学部助教授、現在は旭川医科大学入学センター専任教授）執筆による「同窓会沿革」に準拠したものである。

さて、今回紹介する回顧資料は、同じ『同窓会誌』第8号に寄せられた、当時の下田学長（第3代学長）・山田守英元学長（初代学長）・黒田一秀前学長（第2代学長）の、同窓会創立10周年の祝辞である。いずれの祝辞も、成長した教え子たちに寄せる慈愛のこもった眼差しに満ち溢れている。この、3代にわたる元学長は、いずれも故人となられてしまった。隔世の感を禁じ得ない。

（旭川医科大学 歴史・哲学 藤尾 均）

＝回顧資料＝

## 十周年記念号に寄せて

学長 下 田 晶 久

昭和54年3月24日土曜日、78名の卒業生とこれを送り出す教職員とは、仮校舎の入学式に始まった5年半の多端な歳月を振り返り、それぞれに深い感慨を抱いて第1回卒業証書授与式に臨んだ。北海道民の悲願に応えて設置された新設医科大学初の卒業式とあって、櫓を組んだテレビカメラが入るやら、式後数名の卒業生にインタビューのマイクが向けられるやら、ひととき式場の体育館は熱気を帯びた興奮に湧き立った。今なお鮮やかに眼に浮かぶ一昔前の光景である。

平成元年、旭川医科大学同窓会は十周年を迎え、その記念号が発行されると言う。会員数はすでに1,252名に達している。みごとに育った同窓会に心から祝福を贈りたい。古来卒業生と出身校との関係は、母校という言葉が示すように洋の東西を問わず親子に喩えられているが、英語圏の an alumni association（同窓会）とは、里子のラテン語 *alumnus* に由来すると言うから、さしずめ出身校は、育ての親の役割を担う事になるのであろうか。いずれにせよ、子の成長を願わぬ親はなく、一人前の相談相手に成って貰える日の、一日も早からん事を期待するのが世の常の親心であろう。

全国に散って診療の第一線や教育・研究の中堅として活躍する同窓生の数も年々増え続け、風の便りにその良い評判を耳にした日は一日中明るい気分になる。母校に留まって教壇に立つ同窓生も現在既に10名を越えるに至った。最近になって英国留学中の第8期生から、目下熱帯病の研究に従事しており、将来はアフリカで診療に携わりたいとの便りが届いた。誠に頼母しく嬉しい限りである。同窓会誌は、たとえ住所録のみに留まる号であっても、各自の動静を伝え互いの励みになる点で、会員にとっては貴重な情報源である。その巻末に添えられた

日本地図を見る度に、全国に限なく分布する卒業生の健闘が伝わって来て、それぞれの多幸と発展を祈らずには居られない。2年前から学生課が入学志願者向けに発行するようになった大学案内の中に、この卒業生分布図を転載させて貰って居る。会員個人の活躍が立派に母校に貢献している一例である。

昭和59年秋、同窓会設立五周年を記念し併せて開学十周年を祝って母校に寄贈された時計塔は、烈日の夏や霧氷の厳冬にも毅然と耐えて、下を通る学生、教職員にキャンパスの時を告げ続けている。部屋の机に向かって居ると、この塔と競うように育った白樺の梢越しに窓外から語りかけてくれて、同窓会を身近に感ずるよすがになっている。このたびの十周年記念にも、附属病院の外来ホールに4枚組の「北海道の四季」と題する染織美術品が寄贈された。訪れる患者さんの心に同窓生の暖かい思いが伝わる何よりの贈り物と感謝している。それについても、毎年卒業生を送り出して同窓会員の数を増やしているのは大学自身であるが、一人一人の会員から見た本学は、人生の一時期の養い親に過ぎない。同窓会の真の発展を願うからには、会員諸氏から生涯母校と呼ぶに相応しい評価が得られるよう、大学は自らの充実と発展に努力し続けなければなるまい。頼母しく育ちつゝある旭川医科大学同窓会の十周年に当り、自戒を込めて更なる10年後の本会の一層の隆盛を願うと共に、会員各位の御健勝を心からお祈りする次第である。

## 旭川医科大学同窓会 10 周年に寄せて

初代学長 山 田 守 英

旭川医科大学同窓会は、今年発足10周年を迎えた。同窓会は昭和54年第1期生が卒業した年に設立された。当時卒業生の数は僅か78余名に過ぎず、しかも卒業後年月も浅く、それぞれ臨床研修に忙しく、あるいは専門の研究に着手したばかりで、同窓会設立を企図する余裕などない時期であったと思う。それにも拘らず、多くの困難を克服して、斯くも早期に同窓会を設立し、会誌創刊号を発行したことは、洵に驚嘆に値する。爾来年々会員数は増加し、同窓会誌も関係役員諸氏の努力によって漸次充実して今日に至っている。更に昭和59年には、同窓会設立5周年の記念事業として、母校に時計を寄贈された。それは大学キャンパスの管理棟前庭に建設された高さ10米ほどの時計塔で、日夜一瞬も休むことなく正確に時を刻んでいるが、今では大学キャンパスにおける1つのシンボルとして、在学の学生、職員にとっても馴染み深いものとなっている。

申すまでもなく、大学同窓会は、母校卒業生全員が自動的に会員となるので、卒業年次が重なると共に会員数は年々、ほぼ一定数ずつ増加する。旭川医科大学では、今年第12期生が卒業し、卒業生総数即ち同窓会々員数は1,250余名となった。斯くて同窓会は、大学が存続する限り、会員数は益々膨張し、繁栄することになるであろう。

今、本学の卒業生諸氏の動向を見ると、70%余は北海道内に定着し、特に母校旭川医科大学を中心として、多数が道北地域で活躍しているが、勿論広く道外の都府県にも進出し、遠くは沖縄にまで及び、医療に、そして研究に励んでいる。特に母校旭川医科大学では、現在各期の卒業生諸氏が多数、卒業年次に応じて臨床医学の各専門領域において医療の実践に当り、あるいは臨床研修に専念し、また専門研究の進展に若手の研究者として懸命に研鑽している。洵に頼もしい限りで、ご同慶に堪えない。

今年は恰も 1990 年で、10 年後には 21 世紀を迎えることになるが、惟うにわが旭川医科大学の卒業生諸氏は総べて 21 世紀の社会に生き活動する人々である。殊に第 1 ~ 5 期の先輩卒業生諸氏は、21 世紀の黎明には、既に不惑の齢を越え、経験豊かな然も実力もあり活動力の最も旺盛な時期で、それぞれの専門分野で中堅として更には先達として活躍することになるであろう。21 世紀における医学・医療の飛躍的進展は諸氏の活躍に負うところが大であると思う。

また母校旭川医科大学も、当然時の流れと共に世代は移り、21 世紀には本学の卒業生諸氏が中核となって大学は維持され発展することになるであろう。この意味においても卒業生諸氏の責務は極めて重く、愈々精進研鑽されんことを希うものである。

同窓会は、卒業年次こそ異なれ、共に旭川医科大学を“学びの故郷”とした卒業生諸氏によって構成される。それ故卒業生諸氏は同窓会を通してお互いに相携え、激励し合い、交友を深めることができ、同時に母校と深く結ばれるであろう。この意味において同窓会誌は、会員相互、そして会員と母校を繋ぐ唯一の絆となるものである。

このたび旭川医科大学同窓会は設立 10 周年を迎え、これを契機に将来へ新たな飛躍を計画している。同時に同窓会誌“10 周年記念号”には、会の歴史、会員の消息、随想、更に母校大学及び病院における会員諸氏の活動状況などが詳細に盛られ、充実した意義深い会誌が刊行されることになっている。

ここに旭川医科大学同窓会 10 周年記念を祝し、その将来輝かしい発展と会員諸氏のご健勝で繁栄あらんことを祈念して止まないものである。

## 旭川医科大学同窓会十周年おめでとう

前学長 黒 田 一 秀

旭川医科大学が始まったのは昭和 48 年で学生は 100 人いるだけでありました。学生会とゆうものの発足を当然予測して、学生がクラブ活動をする費用に、すぐ間に合うようにと、おせっかいにも若干のお金を入学のときに学生から徴収してありました。大学紛争の余燼くすぶるころでしたから、いわゆる自治会を主張する新入生諸君と学校側と、会則等についての折り合いがなかなかつかず、現在の校友会の発足には 3 回生の入学まで俟たなければならなかったのです。1 期生、2 期生のかたがたは御存じでありましょう。そんなことで苦勞するなんて腕のない大学当局として恥じ入るばかりですが、とにかく結果として 3 回生までの会費がプールされたので、それはそれで良かったのかもしれませんが、こんな時に古い大学なら同窓会とはいわなくとも有力な卒業生の一人や二人が相談に乗ってくれたかもしれないと思ったことでありました。

そのような無の状態から、昭和 54 年に第 1 期の卒業生 78 名が社会人に仲間入りし同窓会を発足させ、いま 10 年を経て 1,200 名を超える組織に成長したのです。その間にも、キャンパス内に開学十周年の記念植樹をしたり、会設立 5 周年には管理棟前庭に高さ 10 m の時計塔を寄贈するなど、母校に対してそれなりの立派な貢献をしてきています。これまでに運営してこられた歴代の役員のかたがたのご努力を多ししなければなりません。同窓会はもちろん同期会などでも、お世話に献身してくれる人がいなければ、活動は難しいものです。

一方、それにもまして何よりも嬉しいことは、本学の卒業生である会員のお一人お一人が自分の仕事を通してそれぞれの持ち場で良い働きをされていると聞くことであります。どんな小さな働きでも値打ちに大小はないの

です。無限大の理想に繋がっているからだと思います。その全体が同窓会であると思います。

近頃は卒業後5周年10周年を機会に同期会が開かれたり関東とか四国とか地区ごとの同窓会も持たれるようになった由ですが、まことにご同慶に堪えません。同窓の関わりは苦楽哀歓を共通して持った長い学園生活に基づいています。臨床医、医学研究者、医療行政官、勤務医、独立開業医、まれには医を離れた人も、本学で学んだ人は、みんな旭川医科大学卒を履歴とするわけです。これを返上することはできません。かけがえのない時を共にしたのです。そして卒業生に対する世の評価も悪くないようです。喜ばれています。医師過剰時代といいますが良い働きをする医師が捨て去られることはないでしょう。社会では同窓会の皆さんに大きな期待をかけているのです。

いま、会員の70%が道内、30%道外とほぼ全国各地にわたり、海外で研究診療に従事する人も増えてきました。母校の助教授、講師も生まれました。今までどんなにほめられても、それは経験を積んだ指導的立場のものではありませんでした。若者としての評価でした。これからは一人前かどうか問われるのでしょう。皆さんの眼前には新しい馳せ場が限りなく広がっています。過去の評判などに拘束されることはありません。お一人お一人が毎日新しく前進されればよいことでもあります。活躍に期待致します。会も、毎年新会員を迎えて、いよいよ充実してくるでしょう。新規事業を計画して下さい。どうか好ましい圧力団体として、学生たちに良い刺激を与えて下さい。立派な同窓会の存在が、更に活力ある若者を牽きつけるのです。この10年がこのことを実証しています。旭川医科大学同窓会の次の10年を待ち望んでお祝い申し上げます。おめでとうございます。